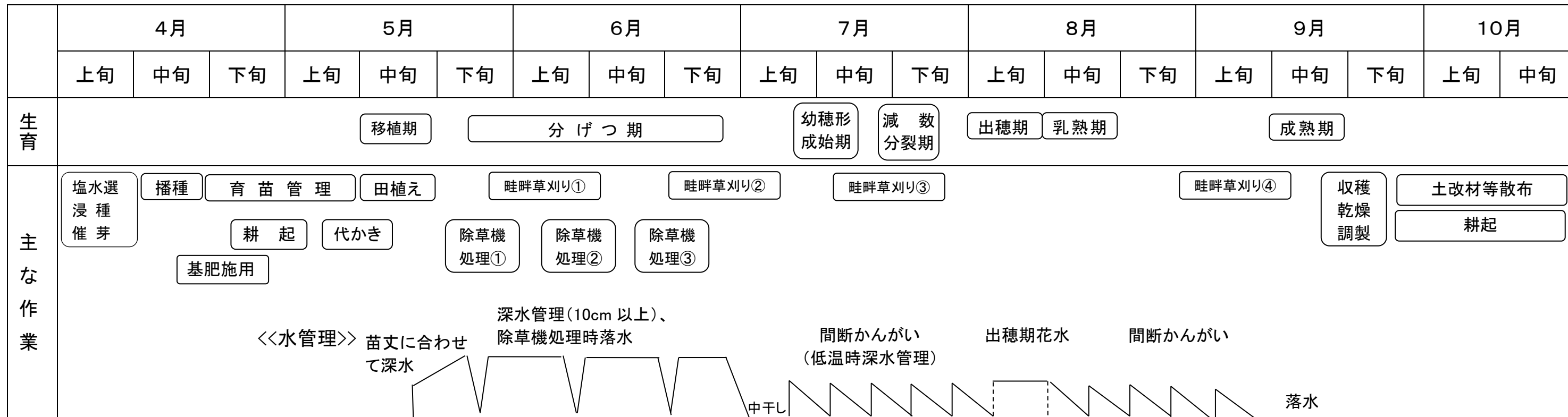


★品質目標
 ・玄米タンパク質含有率：6.4%以下（水分15%換算）
 ・農産物検査等級：1等
 ・整粒歩合：85%以上

磐梯さとやまの慧み（有機栽培「里山のつぶ」）栽培暦

グリーンな栽培体系

福島県会津農林事務所



栽培上の要点

○種子予措
 ・塩水選（比重 1.13）を実施する。
 ・温湯消毒（60℃, 10分）を実施する。
 ・水温を確認して十分に浸種を行う。
 ・生物農薬による防除も可能。

○移植
 ・栽植密度は条間 30×株間 16～18cm（坪 60～70 株、18～21 株/㎡）を基本とし、極端な疎植は行わない。
 ・風の無い暖かい日に移植する。

★水管理
 ・苗丈に併せて水深を徐々に深くする（苗が水没しない程度）。
 ・ノビエの発生を抑制するため、中干しまで10cm以上の深水を維持する。
 ・除草機処理時には2cm程度の浅水。
 ・自動水管理システムを活用し、水管理作業の省力化に努める。
 ・システム利用時の水管理作業時間は **慣行水管理作業時間比の44%※**
 （水位計+給水ゲートの12cm自動給水設定で約1カ月の水管理作業がスマホ操作のみで可能）

○施肥
 ・窒素施肥量 **基肥8～10kg/10a**（地力により加減する）
 ・穂肥は基本的に行わない。
 ・春採取の土壌分析結果から不足する苦土や微量元素を別途施用する。

○いもち病防除
 ・補植用置苗は早急に撤去する。

○イネドロオウムシ防除
 ・多発する地域においては有機栽培で許容される箱処理剤を使用する。

★除草機処理
 ・移植後～6月中に3回の除草機処理実施を目安とする。1回目は移植後10日を目安に実施する。雑草の発生始～2葉期末満にあたり、株間の除草効果が高い。
 ・その後、10～12日毎に実施し、6月中に作業を終える。

○幼穂形成期以降の水管理
 ・基本は間断かんがいを実施、走り穂が見えて傾穂初めまで湛水。
 ・落水は出穂30日後を目安とし、早期落水はしない。
 ・水管理システムは中干し期以降、稲の葉身等による干渉がおこり誤作動を生じやすい。設置場所をイネがない場所に移動する等工夫が必要となる。

<低温時の水管理>
 ・出穂30日前から出穂までの間に平均気温20℃以下の低温が予想される場合は、幼穂の高さまで入水し、幼穂の保温に努める。

<夏季高温時の水管理>
 ・「飽水管理」や「昼間湛水、夜間落水」とする。

○斑点米カメムシ類への対応
 ・畦畔の草刈り
 生育期間中に4～5回実施し、カメムシ類の繁殖源を極力減らす。
 ラジコン草刈機等のスマート機器を利用し、省力的に実施することが望ましい。ラジコン草刈機の利用により慣行(刈払機利用)比50%の作業時間削減※
 出穂14日前～出穂後3週間は草刈りを行わない。
 ・色彩選別機の利用
 玄米は色彩選別機を利用し、斑点米を除去する。

○刈取適期
 ・刈取り始めの判断は籾の黄化率を必ず確認。黄化率80%以上が刈り始めの目安。
 ・刈取時期の出穂後積算気温…1,000～1,150℃

○乾燥・調製
 ・急激な乾燥や過乾燥、高水分籾の乾燥などを避ける。
 ・二段乾燥を行い、乾燥ムラや胴割れ米の発生を防ぐ。

○生育の目安

時期	項目	指標値
移植1カ月後	葉色(SPAD502値)	38～42
	茎数(本/㎡)	350～400
幼穂形成始期	葉色(SPAD502値)	36～42
	収量(kg/10a)	360～420
成熟期・収穫期	登熟歩合(%)	85～90
	穂数(本/㎡)	300～350
	籾数(万粒/㎡)	1.8～2.1

★稲わら処理
 ・苦土石灰 100kg/10a、発酵鶏糞 100kg/10a を散布し、なるべく早く稲わらとともにすき込む。
 ・耕起深は10cm以下の浅めでよい。スタブルカルチを利用するとより効率的に作業が実施できる。
 ・秋鋤込み実施により、未実施に比較してメタンの発生量を4割程度低減することができる。

※令和4年度検証結果による。